

教授 **小松 美彦** KOMATSU, Yoshihiko

1. 略歴

1982年3月 東京大学教養学部基礎科学科卒業（教養学士）
1985年3月 東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論修士課程修了（理学修士）
1985年4月 東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論博士課程進学
1989年3月 東京大学大学院理学系研究科科学史・科学基礎論博士課程単位取得退学
1994年4月 玉川大学文学部 助教授
2000年4月 東京水産大学水産学部 助教授
2002年3月 東京水産大学水産学部 教授
2003年10月 東京海洋大学海洋科学部 教授（東京水産大学と東京商船大学が統合されたことに伴う名称変更）
2012年4月 東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科 教授（東京海洋大学の大学院化に伴う名称変更）
2013年4月 武蔵野大学教養教育部会 教授
2015年4月 博士（学術） 東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻
2018年5月 東京大学大学院人文社会系研究科 教授

2. 主な研究活動

a 主要業績

(1) 著書

『死は共鳴する—脳死・臓器移植の深みへ』, 勁草書房, 1996年6月, 322頁.
『黄昏の哲学—脳死臓器移植・原発・ダイオキシン』, 河出書房新社, 2000年10月, 205頁.
『対論 人は死んではならない』, 春秋社, 2002年11月, 326頁.
『脳死・臓器移植の本当の話』, PHP研究所, 2004年5月, 424頁.
『自己決定権は幻想である』, 洋泉社, 2004年7月, 222頁.
『生権力の歴史—脳死・尊厳死・人間の尊厳をめぐって』, 青土社, 2012年11月, 429頁.
『生を肯定する—いのちの弁別—にあらがうために』, 青土社, 2013年8月, 319頁.

(2) 共編著

小松美彦, 土井健司編『宗教と生命倫理』, ナカニシヤ出版, 2005年5月。（論文：「なぜ「宗教と生命倫理」なのか」, 3-23頁.）
小松美彦, 香川知晶編『メタバイオエシックスの構築—生命倫理を問いなおす』, NTT出版, 2010年3月。（論文：「メタバイオエシックスの構築に向けて」, 3-38頁.）
小松美彦, 市野川容孝, 田中智彦編『いのちの選択—今, 考えたい脳死・臓器移植』, 岩波書店, 2010年5月。（論文：「知っておきたい, 考えたい, 脳死・臓器移植13のこと」第4節-第8節, 14-30頁.）
香川知晶, 小松美彦編『生命倫理の源流—戦後日本社会とバイオエシックス』, 岩波書店, 2014年3月。（論文：「科学技術政策とライフサイエンス」, 43-72頁, 「終論」, 315-326頁.）

(3) 論文

「生命論の系譜と歴史叙述」（河本英夫との共著）, 『科学史研究』150号, 1984年6月, 81-87頁.
「ベルナール生命観の歴史的境位」, 長野敬編『ベルナール 動植物に共通する生命現象』, 朝日出版社, 1989年2月, VII-LX頁.
「先端医療と脳死論争の死角」, 『現代思想』21巻5号, 1993年5月, 198-212頁.
「臨床医学の暗流」（上）, 『現代思想』21巻12号, 1993年12月, 250-262頁. 同（下）, 22巻1号, 1994年1月, 251-267頁.
「脳死・臓器移植における「死の自己決定権」の実像と淵源」, 『月刊フォーラム』7巻2号, 1996年12月, 25-28頁.
「「死の自己決定権」と「共鳴する死」」, 『imago』7巻13号, 1996年12月, 120-135頁.
「「臓器移植法案」の意味するもの」, 脳死臓器移植を考える委員会編『愛ですか？臓器移植』, 社会評論社, 1997年12月, 57-67頁.
「学校教育における生命倫理の問題に関する研究」（三井善止・近藤洋子・岡島佳樹との共著）, 『玉川大学学術研究所紀要』3号, 1997年12月, 75-79頁.

- 「死の自己決定権を考える」, 山口研一郎編『操られる生と死』, 小学館, 1998年3月, 109-152頁.
- 「死の声 声の囁り」, 『MORALIA』5号, 1998年6月, 39-54頁.
- 「臓器移植の登場と展開—その技術史的・社会史的考察」, 中山茂・後藤邦夫・吉岡齊編『通史 日本の科学技術5—II 国際期1980—1995』, 学陽書房, 1999年4月, 834-856頁.
- 「追想の彼岸と此岸」, 『情況』第2期10巻3号, 1999年4月, 80-93頁.
- 「戦争と死をめぐる原基的考察」, 『木野評論』30号, 1999年4月, 192-199頁.
- 「臓器移植法案」の意味するもの「決定的な一歩をふみだした1999年」, 脳死臓器移植を考える委員会編『愛でるか? 臓器移植 増補改訂版』, 社会評論社, 1999年11月, 61-71, 72-73頁.
- 「性」「健康」「死」にみる学校教育における生命倫理の問題に関する研究(三井善止・近藤洋子・岡島佳樹との共著), 『玉川大学学術研究所紀要』5号, 1999年12月, 69-94頁.
- 「自己決定権」の道ゆき—「死の義務」の登場(上), 『思想』908号, 2000年2月, 124-153頁. 同(下), 『思想』909号, 2000年3月, 154-170頁.
- 「脳死・臓器移植と文明のゆくえ—生命倫理学の視点から」, 渡邊悦夫・中村和夫編『科学技術を学ぶ者の倫理』, 成山堂書店, 2000年10月, 27-51頁.
- 「文化・文明論としての生命倫理学—生物医学・生命工学の現状を見つめて」, 『国際高等研究所報告書2001-005 科学の文化的基底』, 2001年10月, 101-120頁.
- 「脳死概念の再検討」, 『生物学史研究』68号, 2001年12月, 61-64頁.
- 「他者・共同体・死」, 情況出版編集部編『科学・環境・生命を読む』(笠井潔との共著), 情況出版, 2002年3月, 186-208頁.
- 「バイオエシックスの成立とは何であったのか」, 『アソシエ』9号, 2002年4月, 34-57頁.
- 「脳死」, 「臓器移植」, 市野川容孝編『生命倫理とは何か』, 平凡社, 2002年8月, 88-94, 95-101頁.
- 「今日の生命操作の淵源を考える—「ハーバード大学基準」とは何であったのか」, 『生物学史研究』70号, 2002年12月, 115-118頁.
- “The Dignity of the Human Body,” *Echoes of Peace*, no. 64, 2003年1月, pp.6-9.
- 「脳死者は生きている—管理社会の中の先端医療」, 『現代思想』32巻14号, 2004年11月, 126-140頁.
- 「バイオエシックスは死生をどう捉えてきたのか」, 慶應義塾大学教養研究センター編『生命の教養学—科学・感性・歴史』, 慶應義塾大学出版, 2005年2月, 14-41頁.
- 「人体革命」の臨床哲学へ, 『国際高等研究所報告書0207 臨床哲学の可能性』, 2005年3月, 137-146頁.
- 「脳死・臓器移植を検証する」, 臓器移植法改正を考える国会議員勉強会編『脳死論議ふたたび』, 社会評論社, 2005年8月, 151-172頁.
- 「有機的統合性」概念の戦略的導入とその破綻—脳死問題の歴史的・メタ科学的検討, 『思想』977号, 2005年9月, 24-51頁.
- 「尊厳死法制化」の歴史構造を概観する, 『教養研究』13巻2号, 2006年12月, 7-30頁.
- “The Age of Revolutionized Human Body and the Right to Die,” W. Lafleur, G. Bohme, & S. Shimazono ed., *Dark Medicine: Rationalizing Unethical Medical Research*, Indiana University Press, 2007年7月, pp.180-200.
- 「人体革命」の時代を考える—「人間の尊厳」概念と「自己決定権」に対する批判的視座, 島藺進ほか編『悪夢の医療史—人体実験・軍事技術・先端生命科学』, 勁草書房, 2008年10月, 233-273頁.
- 「臓器移植法改定 A案の本質とは何か—「脳死=人の死」から「尊厳死」へ」, 『世界』794号, 2009年6月, 47-53頁.
- 「西洋医学思想における死生観の展開」, 清水哲郎編『岩波講座哲学第8巻 生命/環境の哲学』, 岩波書店, 2009年6月, 17-40頁.
- 「爛熟する生権力社会—「臓器移植法」改定の歴史的意味」, 『現代思想』39巻7号, 2010年3月, 104-108頁.
- 「倫理」は何処にあるのか, 『文藝 月光』2号, 2010年7月, 213-218頁.
- 「封印された「死の灰」はそれでも降る」, 『現代思想』39巻7号, 2011年5月, 104-108頁.
- 「生命問題をめぐる視点と死角」, 『Tasc Monthly』no. 427, 2011年7月, 18-23頁.
- 「脳死論—歴史的・メタ科学的検討」, 倉持武・丸山英二編『シリーズ生命倫理学3 脳死・移植医療』, 丸善出版, 2012年1月, 43-66頁.
- 「死への廃棄」と「身体利用」の基底—生資本主義・生権力・人間の尊厳, 実存思想協会編『生命技術と身体—実存思想論集X XVII』, 理想社, 2012年6月, 33-60頁.

「戦後日本の科学技術政策と批判勢力の様態—バイオエシックスの導入とは何か」、『情況』第4期2巻6号, 2013年12月, 14-42頁.

「医療政策としての脳死・尊厳死—私たちはナチスを断罪できるのか」, 山口研一郎編『国策と犠牲—原爆, 原発, そして現代医療のゆくえ』, 社会評論社, 2014年11月, 140-173頁.

「中村禎里の描いた軌跡—学生運動から科学の体制化批判・生物学の近代化の再検討へ」, 『生物学史研究』第92号, 2015年8月, 48-63頁.

「特集「科学技術政策と大学改革」劈頭にあって」, 『情況』第4期4巻10号, 2015年12月, 40-48頁.

「村上医療論・生命論の奥義」, 柿原泰・加藤茂生・川田勝編『村上陽一郎の科学論—批判と応答』, 新曜社, 2016年12月, 336-363頁.

「[医の倫理]を考える」, 『臨床麻酔』41巻1号, 2017年1月, 19-26頁.

「(いのち)はいかに理解されるか—科学的生命観と人生論的生命観」, 『学会議叢書24 (いのち)はいかに語りうるか?—生命科学・生命倫理における人文知の意義』, 2018年3月, 55-115頁.

(4) 教科書

『科学史指導書』, 玉川大学通信教育部, 1996年3月, 50頁.

『資料集(死生学特講)』, 武蔵野大学大学院通信教育部, 2013年4月, 99頁.

(5) 翻訳

クロード・ベルナール, 長野敬編『ベルナール 動植物に共通する生命現象』(Claude Bernard, *Leçons sur les phénomènes de la vie communs aux animaux et aux végétaux*), 朝日出版社, 1989年2月. 金森修, 鬼頭秀一, 松浦俊輔, 斎藤光との共訳.

(6) 研究報告書

「日本の法学界における脳死概念の展開—唄孝一氏聞き取り調査概要」, 『平成12年度～14年度科学研究費補助金(基盤研究C[2] 報告書 科学知識の生産・流通・受容過程の解明 課題番号1268001)』, 2005年3月, 21-26頁.

「脳死以前の死の基準—中山研一氏聞き取り調査概要」, 『平成12年度～14年度科学研究費補助金(基盤研究C(2) 報告書 科学知識の生産・流通・受容過程の解明 課題番号1268001)』, 2005年3月, 27-33頁.

「総論」, 『文部科学省 平成18・19年度科学研究費補助金(萌芽研究)(課題番号・18650258)「バイオエシックスの歴史的・メタ科学的検討—メタバイオエシックスの構築を目指して」報告書』, 2008年3月, 1-16頁.

(7) その他

「死の黄昏」, 『本』18巻8号, 1993年8月, 60-62頁.

「天国の置き換えと置き換え 地獄」, 『現代思想』22巻3号, 1994年3月, 266頁.

「剽窃「三稗人経論問答」」, 『月刊フォーラム』55号, 1995年2月, 62-73頁.

「ゆらぎとゆがみのなかの死」, 『imago』7巻1号, 1996年1月, 8-11頁.

「脳死・臓器移植 学会見切り発車 代替医療確立こそ急務」, 『朝日新聞』1996年11月6日夕刊.

「安楽死・尊厳死・死の自己決定」, 『イミダス』1997年版, 1997年1月, 13頁.

「人間的な科学技術とは—分水嶺としての脳死・臓器移植の裁定」, 『連絡会だより』7号, 1997年3月.

「脳死・臓器移植問題で何が問われているか」, 『Guideline』1997年5月号, 1997年4月, 54-59頁.

「周囲の人との関係で成立する「死」」, 『北海道新聞』1997年4月25日朝刊.

「日本人の死生観に波紋」, 『京都新聞』1997年4月25日朝刊など「共同通信」からの配信.

「共鳴する死」, 『大法輪』64巻2号, 1997年6月, 58-59頁.

「死は「私のモノ」じゃありません」, 『New Paradigm』1997年夏号, 1997年6月, 28-41頁.

「臓器移植法成立に思う」, 『信濃毎日新聞』1997年6月20日朝刊など「共同通信」からの配信.

「忘れられた共鳴する死」, 『毎日新聞』1997年8月3日朝刊.

「壊された夜」, 『週刊読書人』1997年9月12日.

「隠蔽の歴史」, 『週刊読書人』1997年9月19日.

「臓器移植法は人の死を変えたか」, 『日本の論点』1998年版, 1997年11月, 430-433頁.

「葬儀への提言」, 『SOGI』8巻1号, 1998年1月, 49-52頁.

「[宮台真司の『世紀末の作法』]に提言する」, 『週刊読書人』1998年10月9日.

「思想の進行形—生命操作」, 『京都新聞』1998年11月5日朝刊.

「[宮台真司の『世紀末の作法』]に再び提言する②」, 『週刊読書人』1999年1月29日.

「科学時評①—諸学の科学技術に対する横断的討究が火急の要件」, 『図書新聞』1999年1月30日.

「科学時評②—高木仁三郎の偉業の集大成」、『図書新聞』1999年3月6日。

「いかなる文明を望むのか」、『毎日新聞』1999年3月29日朝刊。

「科学時評③—TV報道の問題にすり変わったダイオキシン問題」、『図書新聞』1999年4月3日。

「科学時評④—先の脳死・臓器移植から2カ月、月刊誌の反応を読む」、『図書新聞』1999年5月8日。

「科学時評⑤—通底する「臓器移植法」と「新ガイドライン関連法」」、『図書新聞』1999年6月5日。

「科学時評⑥—現代生物医学に対する政治学・経済学的分析が必要」、『図書新聞』1999年7月10日。

“Les journalistes japonais sont prêts au combat.” *Courier International*, No.445 du 12 au 19 mai 1999, 1999年7月, p.58.

「科学時評⑦—批判機能を失った新聞の奮起を期待する」、『図書新聞』1999年7月31日。

「科学時評⑧—『買ってはいけない』ベストセラー化を支える優生思想」、『図書新聞』1999年9月4日。

「科学時評⑨—科学技術は低迷する経済の起爆剤か」、『図書新聞』1999年10月2日。

「臓器移植・コソボ・世界資本主義」、『アソシエ21 ニューズレター』No.6, 1999年10月, 12-13頁。

「科学時評⑩—対応・対策の杜撰さ—JCO 東海事業所の臨界事故」、『図書新聞』1999年10月30日。

「科学時評⑪—利権構造こそ臨界事故の原因」、『図書新聞』1999年12月4日。

「科学時評⑫—現代科学技術の何を保持し何を帝国主義的なものとして排除するか」、『図書新聞』2000年1月1日。

「死」、『現代思想 臨時増刊：現代思想のキーワード』28巻3号, 2000年2月, 192-195頁。

「脳死・臓器移植再論①」、『週刊読書人』2000年5月11日。

「脳死・臓器移植再論②」、『週刊読書人』2000年5月19日。

「脳死・臓器移植再論③」、『週刊読書人』2000年5月26日。

「「死」の管理システムとしての臓器移植法」、『AERA Mook 死生学がわかる』60号, 2000年5月, 10-17頁。

「脳死・臓器移植と文化のゆくえ」、『文化資本』1号, 2000年9月, 48-50頁。

「私が選んだ20世紀の3冊」、『京都新聞』2000年12月24日朝刊など共同通信からの配信。

「21世紀のための20世紀の文化遺産」、『季刊 iichiko』70号, 2001年4月, 26-29頁。

「戦争と優生学—その過去と現在」、『20世紀の検証と現代』, 2001年5月, 27-28頁。

「科学とは」という問いを宙に浮かせないためには」、『科学』71巻6号, 2001年6月, 804-805頁。

「特集「科学技術とリスク論」劈頭に寄す（廣野喜幸との共著）, 2002年1月, 『情況』第3期3巻1号, 6-7頁。

「死に瀕す」、『論座』89号, 2002年10月, 172-174頁。

「それでも臓器移植はやめるしかない—臓器提供が増えない本当の理由」、『日本の論点』2003年版, 2002年11月, 528-531頁。

「遺体の「力」」、『一冊の本』8巻6号, 2003年6月, 52-54頁。

「考えることの意義は」、『読売新聞』2004年3月14日朝刊。

「市民が考える脳死・臓器移植—専門家との対話を通じて」、『「脳死・臓器移植」を考えた市民パネルの活動記録—専門家との対話から市民の提案へ』, 2005年4月, 49-50頁。

「こころの風景—子供の苦楽」、『朝日新聞』2005年8月1日夕刊。

「こころの風景—原っぱの役割」、『朝日新聞』2005年8月2日夕刊。

「こころの風景—移植教育」、『朝日新聞』2005年8月3日夕刊。

「「尊厳死」の法制化を問う」、『新宗教新聞』2006年4月25日。

「巻頭エッセイ 自己決定権の現在」、『科学』76巻10号, 2006年10月, 巻頭頁。

「21世紀を読む—脳死・臓器移植再考」、『毎日新聞』2007年1月21日朝刊。

「ワークショップ4「メタ・バイオエシックス」の構築に向けて」、『日本生命倫理学会ニューズレター』33号, 2007年2月, 7頁。

「大学の惨状とそれを取り巻く歴史的構造」、『科学』77巻5号, 2007年5月, 524-525頁。

「第19回日本生命倫理学会年次大会報告 ワorkshop「メタ・バイオエシックス」の構築に向けて(2)」、『日本生命倫理学会ニューズレター』37号, 2008年1月, 4-5頁。

「メタバイオエシックスの構築」、『日本生命倫理学会ニューズレター』41号, 2009年4月, 2頁。

「揺れる臓器移植法—本紙特別寄稿 上」、『高知新聞』2009年6月16日朝刊。

「医療・福祉政策における「野蛮」の廃棄を」、『科学』79巻11号, 2009年10月, 1263頁。

「臓器移植法改定と「生命倫理会議」の結成」、『日本生命倫理学会ニューズレター』42号, 2009年12月, 2頁。

「生物学史研究会報告：西洋医学思想における死生観の展開—歴史研究と現代批判の視座」、『生物学史研究』84号, 2010年10月, 100-101頁。

「シンポジウム開催の趣旨」（共著）、『科学史研究』257号, 2011年3月, 43-44頁。

「脳死・臓器移植の実相」, 『多田富雄三回忌追悼能公演 無明の井 パンフレット』, 2012年4月, 4-5頁.
「中村禎里氏追悼—信念・情熱・気遣いの科学史家」, 『週刊読書人』2014年5月23日.
「安楽死考」, 『多田富雄七回忌追悼能公演 生死の川—高瀬舟考 パンフレット』, 2016年4月, 頁なし.
「弔辞—金森修さんを哀悼する」, 『週刊読書人』2016年6月24日号.
『ニューズレター』最終号に寄せて, 『脳死・臓器移植に反対する市民会議ニューズレター』83号, 2017年2月, 10-11頁.
「第28回日本生命倫理学会年次大会報告—生命倫理の理論」, 『日本生命倫理学会ニューズレター』61号, 2017年3月, 24頁.
「巻頭言 失われたものは何か」, 『科哲』19号, 2018年1月, 2-7頁.

3. 主な社会活動

(1) 学会

1982年～現在 日本科学史学会 (1999年～2006年: 全体委員, 2010年: 第57回年会総会会長)
1984年～2003年 日本18世紀学会
1985年～2004年 野間科学医学研究資料館会員 (1998～2004年: 評議員)
2002年～現在 科学技術社会論学会
2003年～現在 日本生命倫理学会 (2008年～現在: 評議員, 2011～2017年: 理事)

(2) 非常勤講師

日本社会事業大学社会福祉学部 (1988年4月～1989年3月), 法政大学第二教養部 (1988年4月～1994年3月), 玉川大学文学部 (1992年4月～1994年3月), 東京大学教養学部 (1997年4月～2018年4月), 千葉大学法経学部 (1997年4月～1998年3月), 山口大学医学部 (1997年4月～1998年3月), 慶應義塾大学通信教育部 (1998年4月～1999年3月), 兵庫県立看護大学看護学部 (1999年4月～2000年3月), 長野大学社会学部 (2000年4月～7月), 東京外国語大学外国語学部 (2000年10月～2001年3月), 東京大学文学部 (2002年4月～2018年3月), 明治大学文学部 (2002年4月～2006年3月), 埼玉医科大学医学部 (2006年9月～2007年3月), 鳥取大学大学院医学系研究科 (2008年4月～2009年3月), 金沢大学共通教育 (2013年4月～9月), 東京理科大学工学部 (2014年4月～現在)

(3) その他

2014年～現在 公益財団法人倶進会評議員